

投資日報出版

MMA Cycles Report

By Raymond A Merriman

コピー対外配布厳禁

〒103 - 0013 東京都中央区日本橋人形町 3-12-11 GRANDE 人形町

TEL 03-3669-0278 FAX 03-3668-4444

メリマン関連サイト <https://www.toushinippou.co.jp/>

No.412 Nov. 13 2020

1. 回顧と展望

2020年の米大統領選において、まさに民主党候補のジョー・バイデン氏が勝利宣言したその直後から、米国株式市場は軒並み史上最高値を更新した。

大統領選の結果と株高…、これらはいずれも、現在進行形で影響を及ぼしている2つの重要な長期ジオコスミックサイクルと相関性を有している。

1つは20年周期で出現する木星・土星コンジャンクション（0度）。そしてもう1つは45年周期で出現する土星・天王星ウェイニングスクエア（270度）である。

このまま順当に、バイデン勝利のまま彼が来年の大統領就任式に臨む事が出来るのなら、木星・土星会合（コンジャンクション）サイクルと政権交代の相関性は72%から75%に増加しよう。繰り返すが、この惑星ペアサイクルは20年周期。1800年から20年ごとに大統領選をピックアップすると、今回も含めて12回。今回のバイデン勝利によって、12回中9回（即ち75%）の大統領選において、ホワイトハウスで差配する政党が変わる事になった—という確率になる。

一方、土星・天王星のペアサイクルは45年周期。つまりそれは、4分割すると11.25年ごとにハードアスペクト（0度、90度、180度、270度）が出現する計算になる。このハードアスペクト形成場面もまた、米国の舵取りを任された政党の交代と極めて高い相関性を有している。このケースに該当する大統領選は今回も含めて14回。このうち政権交代が起きたケースは今回も含めれば12回。これは確立にして85.7%である。

また米国株式の歴史における我々の研究でも、ここまで提示した両惑星サイクルとの相関性を明らかにしている。

20年周期の木星・土星コンジャンクションサイクルは、±1～9カ月、通常であれば±5カ月以下のオーブ（許容範囲）を伴うと、米国株の長期相場サイクルの天井形成場面と親和性が高い。そして今回、木星・土星ペアは本年12月21日（日本時間22日）に正確なコンジャンクションを形成するので、我々は既にこの“親和性が高い”時間帯に足を踏み入れている。そして、先述の通り米国株式は史上最高値を更新している。

繰り返すが、この惑星会合サイクルの歴史が提示しているのは、米国株式の長期相場サイクルが天井をつける“最も可能性の高い”時間帯は、2020年7月～2021年3月であるという事。そして我々は現在、この時間帯の中間点付近に位置している。

加えて、45年周期の土星・天王星ウェイニングスクエアサイクルもまた、株式市場の長期相場サイクルの天井形成場面、もしくはその天井を試しにかかる場面と相関性がある。そして、これらの高値はスクエア発生直前、もしくは3回以上のシリーズで出現した際の間部分で出現する傾向が高い。なお、今回のスクエアは3回シリーズで発生。（米国時間）2021年2月17日（日本時間18日）、6月14日（日本時間15日）、12月24日に正確な90度の関係（イグザクトリ・スクエア）になる。

長期相場サイクルが天井をつけるという事は、それ以降の相場は（日柄的にも値幅的にも）大きく下げるという事を意味する。

ただ、ここで最も興味深いポイントは、これまで確認された全ての事例において（と言っても2つしかないのだが）、米国史上最も壊滅的な崩落相場上位2例と合致しているという点である。

土星・天王星スクエアは45年周期。2つ合わせると90年になる。そして“壊滅的な崩落相場上位2例”によって長期相場サイクルボトムが出現した年は1842年と1932年。これら2つの歴史的な下落場面に先んじて発生した当時の史上最高値から前者は80%、後者は90%下げていた事が後々判明している。

先ず 1932 年の崩落ケースを検証してみよう。この時、土星・天王星スクエアは都合 5 回発生していた。初回は 1930 年 2 月 22 日に発生。その 5 カ月前にあたる 1929 年 9 月 3 日、米国株式市場は当時の史上最高値を記録している。5 回目のスクエアが発生したのは 1931 年 10 月 16 日。しかし、崩落相場による (買い方の) 大虐殺 (The carnage) は 1932 年 7 月 8 日まで終わらなかった。

更にこの 2 サイクル前に展開された土星・天王星ウェイニングスクエアの時間帯は、上記のような壊滅的な損害を株式市場 (の買い方) にもたらした一とみなす事が出来る。

この時、土星・天王星スクエアは 1835 年 12 月 3 日~1836 年 10 月 10 日までの間に都合 3 回発生していた。そして、初回のスクエアから 7 カ月前にあたる 1935 年 5 月に、株式市場は当時の史上最高値を記録している。この高値から弱気相場に転じた相場は向こう 7 年、即ち 1842 年までトータルで 80% 下落。これは、先述の世界大恐慌 (Great Depression : 1929~1932 年) の時の相場展開に次ぐ記録であった。

そして、この米国株式の歴史的な 90 年サイクルが 1842 年、1932 年に次いで 3 度目のボトムをつける可能性は現在も有効であると考え。更に、45 年周期の土星・天王星ウェイニングスクエアサイクル出現時に発生した、これ以外の歴史的な 3 例を検証すると以下の事が解かる。

先ず 1) 1975 年 10 月~1977 年 4 月まで 5 回シリーズ。この期間中に 1973 年 (1 月) に記録した当時の史上最高値を試しにかかった相場は、1976 年 9 月にこの年の年間高値を記録。73 年高値を更新出来ずに反落した相場はその後 18 カ月間、1978 年 3 月まで下落。結果的にダウ平均は高値から約 30% 下落していた。次に 2) 1885 年 6 月~1886 年 4 月までの 3 回シリーズ。この期間中、22.5 カ月サイクルの天井が 1886 年 2 月に出現している。しかし、その後強気相場が再開。この天井からの下げは、僅か 3 カ月で終わった。そして、最後に 3) 1794 年 7 月 9 日~1796 年 2 月 5 日までの 5 回シリーズ。この期間と合致していると思われるのは、1795 年 4 月に出現した 18 年サイクルの天井。その後 2 年半、弱気相場が続いていた。

勿論、ここまで提示してきた研究結果は解釈の余地がある。何故なら、1792 年に NY 証券取引所が開設されて以降、90 年サイクルはまだ 2 回しか確認されていないからだ。僅か 2 例しかないケースに基づいて「二度ある事は三度ある」と主張するのはいくら何でも無理がある。

しかしながら、木星・土星ペアの会合及び土星・天王星ペアのウェイニングスクエアの両サイクルは株式市場に関連して幾つかのシンクロニシティを提供している。

例えば土星・天王星ペアが重要な相場サイクルの天井形成場面と合致する場合、それはシリーズ開始数カ月前から中間部分までの時間帯の何処で出現してもおかしくはない。これを今回のスクエア形成期間に当てはめると、米国株式は 2021 年 10 月までの何処かで史上最高値を試しにかかるか、更新する可能性を示唆している。更に、今回の木星・土星コンジャンクションが示唆しているのは、2021 年 9 月までの何処か、最も高い可能性としては同年 5 月までの何処かで天井が出現する可能性である。

更にその後の展開だが、先述の 90 年サイクルが有効で、尚且つ一過去 2 回の歴史的相関性が示しているように一土星・天王星ウェイニングスクエアサイクルと相場サイクルに関連性があるなら、壊滅的な売り浴びせがこれら 2 つの惑星ペアサイクル (による天体位相) が終了しても、そこから 1~2 年間、つまり 2022~2023 年まで続く可能性がある。

そしてこれは、私が米国経済や株式市場、並びに群集心理の流れを知覚する上での「形 (かた)」であり、我々の長期的な行動計画の基盤となっている。

2021 年、春分から夏至にかけて (の星回り) は米国にとって良好に見える。そのため、このままバイデン氏が大統領に就任した場合、幸先の良いスタートを切る事になるだろう。

しかし、秋分 (米国時間 9 月 22 日) から第 4 四半期 (米国は通常 10~12 月) に向けて、その流れは一変しよう。ここまでに米国の経済状況、並びに株式市場はピークに達し、ここから相場は景気後退が泣き処になる。それはひょっとすると、過去の 90 年サイクルが示した数字と同様に、(ピークから) 77~93% 減の崩落相場の始まりとなるかも知れない。

この予測に対して、人々はこのように尋ねるのではないだろうか。

「どういった要因で？」

「バイデンさんに何か起こるの？」

「大統領は何か経済を傷つけるようなしでかしをするの？」

これに対する答えは、恐らく「誰も制御する事が出来ない外的要因」になるのではないだろうか。

つまりそれは（地震・ハリケーン・強風等の）自然災害をも含む、ありとあらゆる突発的な事象のことを指す。そしてこれは、“損失”の引き金となるかも知れない水瓶座の土星と牡牛座の天王星に関連している。

天王星が関与する時間帯では、常にサプライズが付きまとう。それ故に「予想外の何か」について、その詳細を具体的に予測する事は難しい。そのため、サイクルとの相関性に関して言えるのはただ一点、株式相場や世界経済を揺るがすような“とんでもない規模”の“予想外”な“何か”が起きるかも知れない—という事だけである。

では、ここまでの記述で示唆している事象が全て、もう 2020 年中に発生していた可能性はあるのだろうか？

答えは「YES」である。米国株式が 6.5 年サイクルボトムをつけると目されている時間帯は 2020~2023 年までの何処か—なので、私自身の見積もりでは恐らく 25%の確率になる。

実際、（コロナショックに伴う）本年3月の安値形成場面は先述の木星・土星コンジャンクション発生日（米国時間 12月21日）±9カ月のエリア何に入っている。しかしその一方で、この3月安値を（来年の）土星・天王星スクエアに関連したサイクルボトムと断じるにはいささか時期尚早である点は否めない。仮に 2020 年中にすでに底打ちしたというなら、今後 1~3年のうちに財政面、政治面、あるいは社会面において何もかもが安定していく事になるのだろうが、現時点でこのような安定を盲目的に仮定するには（材料が）不十分であると言えよう。

常に、我々は最善の結果を期待（hope for the best）している。しかしそれと同時に、より困難な事態に遭遇するかも知れない—という事を知覚し、それに備えておく必要がある。

誤解してほしくないのは、ここで恐怖心を煽ろうとしている訳ではない—という事。むしろそれは、私がこれまで観察して来た「形（かた）」の共有だと考えていただきたい。

私自身の役割は、人間活動におけるサイクルや、その意識が他の人を喪失から守るかも知れない希望、更には機会さえも恐らく与える可能性について、それがどのように惑星サイクルと合致するのかをパターン照合する事であると思っている。そこで浮かび上がった「形」を、私は読者の皆さんと共有したいのだ。

そして、これらの問題については 12 月に発売される『フォーキャスト 2021』の中で詳しく解説していきたいと思う。

キーポイント：

当レポートでのストラテジーの基礎となる、長期相場サイクルの視点から見た「キーポイント」は以下の通り。

- ・20年周期で出現する木星・土星コンジャンクション（会合=0度）サイクルは（米国時間）12月21日に風のサインである水瓶座内で出現する。米国株式における4年以上の長期サイクルの天底は、会合形成日±5カ月のエリア内で出現する事が多く、その大半が天井である。

- ・2021年に入ると（米国時間）2月17日~12月24日までの間、3回シリーズで土星・天王星スクエアが出現する。1930~1931年にかけて5回シリーズでこのスクエアが発生した際、初回スクエア発生日よりも5カ月前の1929年9月に当時の史上最高値が更新されたケースもあった。しかし今回は3回シリーズなので、株式市場は上記の期間の真ん中のあたりまでに中期、あるいは長期の相場サイクルの天井が出現する可能性がある。これに上記の木星/土星ペアサイクルの期間を重ねると、天井は2021年5月までに出現するのが理想的。ただし、2021年10月まで延長される可能性にも留意しておきたい。

- ・金相場は、現行 31.33 カ月サイクルが 2021 年 3 月 ± 5 カ月の何処かで出現しよう。

- ・銀相場は本年 3 月 18 日の 11.64（期近）をもって（いささか早めではあるが）7 年サイクルボトムを形成後に反騰攻勢に入り、驚異的な上昇相場に入っている。ここから相場は 30.00 を超えて行くのではないかと我々は予測している。

- ・Tノート相場は 3 月 9 日に 140/24 で史上最高値を記録した。そして土星/冥王星コンジャンクションサイクルが示唆するものは 2020 年中の最低金利更新。つまり、この相場が年内に長期相場サイクルの天井をつける可能性である。あるいは、ひよっとすると、天井は既につけており、現在新たな弱気相場が展開中なのかも知れない。

- ・2000 年 10 月安値を起点とするユーロ/ドル相場の 16.5 年サイクルは 2017 年 1 月 3 日の 1.0339 をもってボトムをつけ、ここから新たな 16.5 年サイクルが始まっている。前サイクルの序盤に倣って、サブサイクルは 8.25 年サイクルで 2 分割され、更に 33 カ月サイクルで 3 分割されているという見方をしている。起点から 38 カ月目にあたる本年 3 月 23 日、相場は 1.0635 を記録。この安値が第 1—33 カ月サイクルボトムであった公算が高い。従って、長期サイクルの観点ではこの 1.0635 を割り込まない限り、基調は依然として強気である。実際、相場は 9 月 1 日に

1.2000を上回って2年ぶりの高値水準に到達した。そのため、強気基調は1.1100~1.1200を割り込まない限り、更には、恐らく1.1400~1.1600を下回らない限り強気基調は維持されよう。将来的には、今後数カ月以内に1.2500まで上昇する可能性がある。そしてこの3月安値は、起点から32週目にあたる11月4日に1.1602を記録後に反発。引け値ベースで上値抵抗となる各種移動平均を上回った。従ってこの安値が現行PC（通常23~37週）の起点かも知れない。もしそうであれば今週は新PCの1週目。サイクルの序盤は強気なので、今後数週間は強気姿勢が続き、これは上記の見立てとも合致する。

【詳しくは「MMAカレンシーレポート」をご覧ください】

・NY原油相場は4月20日に期近（5月限）で-40.00を記録したが、現在の相場表では21日の6.50（6月限）が期近での安値と見られている。少なくとも、ここで数年来どころか数世代にわたる長期相場サイクルの底打ちが完了したと思われる。従ってここ数年間にわたって価格は上昇していくだろう。それはひょっとすると、2026年2月20日に牡羊座の0度で発生する土星・海王星コンジャンクション（0度）に向かっているのかも知れない。そして、これらの惑星の組み合わせは±18カ月で次のパンデミック（世界的流行）の可能性を示唆している。

・8月4~24日にかけて、火星は山羊座のステリウムに関係する3惑星とスクエア（90度）の関係になったが、この時間帯から穀物相場は反騰攻勢に入った。そして大豆相場は11月に入っても上伸。数年来の高値を再更新している。なお、当レポートでは以前からこう述べていた“…本年1月に発生した土星・冥王星コンジャンクション（0度）は、穀物の生育期に試練を与える可能性を示唆している。それは、通常よりも収穫が減少する可能性をも示唆。大きな反騰と関連性があるかも知れない。…そして、これは恐らく大豆に大きな需要をもたらし、来年に向けて価格を上昇させる可能性がある”。

重要変化日：前後3営業日を含む

11月9~10日 ★★★（現在：この変化日に関しては19日までを意識したい）

11月27日 ★ 12月7~10日 ★★ 12月24~28日 ★★

* メリマン氏の執筆時は、現地時間11月9日（海外マーケット）、11月10日（日経、ドル/円）です

* 次回のMMAサイクルズレポートは12月18日の発行予定です（遅延の場合はお知らせ致します）

2. 米国株式：史上最高値更新

ジョー・バイデンが米国の次期大統領として当選確実になった事、共和党による上院の支配の可能性、新しいコロナウィルスワクチンの発表。これらは全て11月9日の★★★重要変化日付近に集中し、結果的にダウ平均とS&P500を新たな史上最高値に押し上げた。

先月のレポートでは以下のように述べていた“今のところ、9月24日に10%下落した後、相場が再び回復しているという事実から、2020年3月23日の安値は15.5カ月サイクルボトムだけではなく、4年サイクルボトムでもあったと結論付ける事が出来る。更にそのサブサイクルでは、まだ最初の15.5カ月位相にあり、2021年6~7月±3カ月まで底を打たないため、強気が続く。それは、このサイクルの8~13カ月目（2020年11月から2021年4月）に天井が出現する事を示唆し、その時期は2020年12月21日の木星・土星コンジャンクション、及び2021年2月から12月の土星・天王星スクエアのオーブ内に入る”。ダウ平均とS&Pのこの史上最高値を反映するように、長期および中期サイクルの位相を調整した。

長期サイクルの研究

2020年3月23日のコロナショックによる「クラッシュ」は、4年サイクルボトムを確認した。前回の4年サイクルは2015年8月、2016年1月、2016年2月のトリプルボトム。それは「時間通り」であった。

2009年3月と2016年2月の6.5年サイクルのボトムを結ぶトレンドラインを下回ったという事実は、特に2015年8月を正しいサイクルのスタート地点として使用する場合、2020年3月23日安値はより大きな6.5年サイクル（オーブ5~8年）の完了であった可能性がある事を示唆する。S&PとNASDAQの安値だった地点を使用すると、（日柄的には）少し早すぎるため、2021~2023年に6.5年サイクルの通常の間隔に合致する急激な下落がもう一度ある事を示唆している。これは、巻頭の「回顧と展望」の中で解説した土星・天王星のウェイニングスクエアのサイクルに適合する。今のところ、我々は2020年3月23日を4年サイクルボトムとする。

実線は23カ月移動平均、点線は36カ月移動平均。

5～7までが6.5年サイクルボトム（7-aは7のダブルボトム）。

このうち6は長期75年サイクルのボトムでもあった。

75年サイクルは4つの18年（厳密には18.75年）サイクルで構成され、

過去データから導き出せるこのサイクルのレンジは13～21年。2021

年は、6を起点とした第1～18年サイクルの12年目に相当する。



注目すべきは、この相場が2020年3月23日（8）に23カ月平均だけでなく36カ月を割り込んでいたという点である。

次の4年サイクルは、31～68カ月の歴史的なレンジを持っているが、多くは—81.25%の確率で—36～56カ月の範囲に収まる。2020年3月の安値から測定すると、2022年10月から2025年11月までとなり、最も可能性の高いレンジは2023年3月から2024年11月までとなる。6.5年サイクルと一致する場合は、この範囲の初期に該当するため、トレンドは強気よりも弱気となる。そして土星・天王星スクエアは、この見通しをサポートする。6.5年サイクルも2020年3月にボトムをつけたと解釈すれば、新6.5年サイクルのスタートであり、株式市場は強く、恐らく非常に強気となる。史上最高値を更新しているという事実は、この見解を支持するものの、確信に至るには、価格は更に大幅に上昇しなければならない。

拙著「究極の株価タイミング」の研究から4年サイクルに得たものは以下の通りである。即ち、1893年に遡る事例の90.6%では、天井が達成されるまでに少なくとも1年はかかる。少なくとも1年間の反騰に失敗した2回とは、1929年11月の安値と1938年の2度目の安値である。最初のケースは、2020年後半から2021年10月のオーブをもつ90年間隔をもつ土星・天王星ウェイニングスクエアと合致するので重要だ。私はこの4年サイクルは弱気になるだろうし、6.5年サイクルがまだボトムアウトしていない場合、この上昇は2021年10月以前にいつでもピークアウトする事になるだろう、と睨んでいる。

また、サイクルボトムから4年サイクルの天井に向けた上昇は、歴史的なケースの80%以上で少なくとも50%以上の時間で持続する。大多数のケースは70～189%の上昇を示現する。2020年3月23日の18,213の安値から、ダウ平均は4年サイクルの64.3%の時間帯まで上昇したとはいえない。上昇する日柄はまだ残されている。

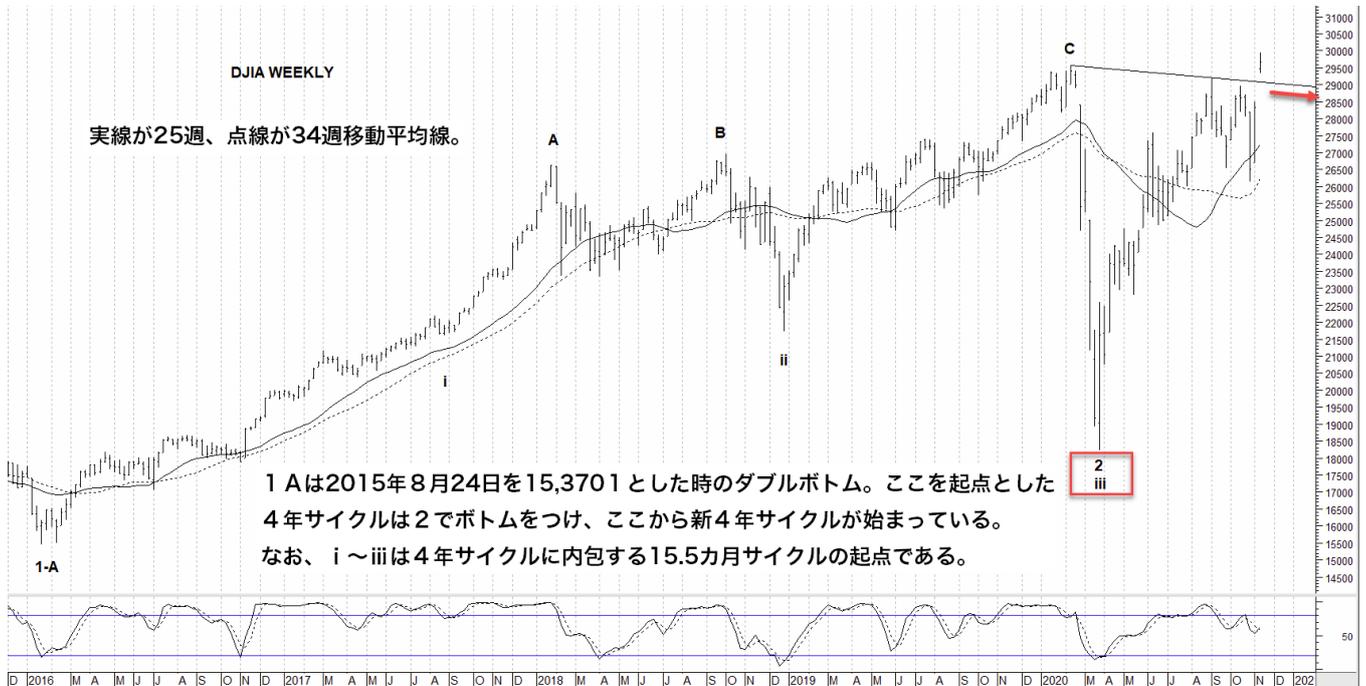
これが新しい6.5年サイクルと4年サイクルの起点である場合、ダウ平均は日柄的には2年以上騰げていく可能性が高く、上値目標値は32,411 +/- 2010、32,487 +/- 3011、または30,962～52,635に設定される。

中期サイクルの研究

4年サイクルは、2つの23カ月サイクルか3つの16.5カ月サイクル（レンジ13～20カ月）か、あるいはこの2つが混在するコンビネーションパターンで構成されている。最初の位相は、通常は13～18カ月のレンジを持つ15.5カ月サイクルとなる。2020年3月23日の安値からカウントすると、最初の15.5カ月のサイクルボトムは2021年4月から9月となる。サイクルトップはその数週間前となるだろう。

11月は、この15.5カ月サイクルの8カ月目。そのため、このサイクルを二分する第1ハーフサイクルボトムは、ダウ平均が26,143に下落し、S & P先物が3,225に下落した10月30日に形成された可能性がある。そしてどちらも現在、史上最高値を更新している。このサイクルの後半も前半同様強気であれば、ダウ平均とS & P先物の価格ターゲットはそれぞれ37,041 ± 2,222と4,611 ± 288となるが、2020年3月以降の極端な状況が再現されるとは思っていない。

私の見解では、この最初の15.5カ月のサイクルフェーズは強気になるだろうが、その後、土星が木星、天王星双方とハードアスペクトを形成するため、慎重な見方をしていく。



前回のレポートでは次の通り述べた“9月24日に10%下落した後、相場が再び回復しているという事実から、2020年3月23日の安値は15.5カ月サイクルボトムだけではなく、4年サイクルボトムでもあったと結論付ける事が出来る。更にそのサブサイクルでは、まだ最初の15.5カ月位相にあり、2021年6～7月±3カ月まで底を打たないため、強気が続く。それは、このサイクルの8～13カ月目（2020年11月から2021年4月）に天井が出現する事を示唆し、その時期は2020年12月21日の木星・土星コンジャンクション、及び2021年2月から12月の土星・天王星スクエアのオーブ内に入る。恐らく、その時期に株価は最高潮に達すると予想される。しかしその後、土星/天王星ペアのほとんどの歴史的なケースと同様に、2020年3月23日の安値から36～56カ月後（2023年3月～2024年11月）には、次の4年サイクルボトムに向け、株価は急落すると予想される。

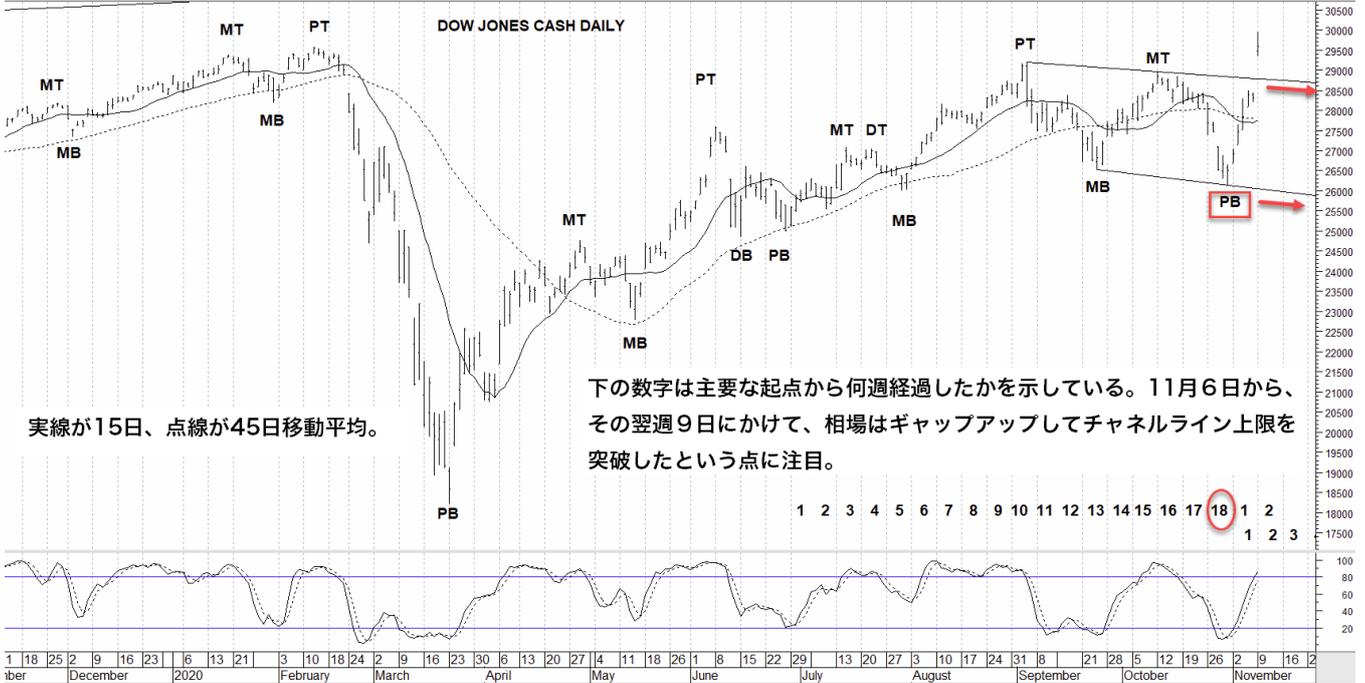
プライマリーサイクル（PC）の研究

ダウ平均は10月30日に26,143まで下落し、9月4日の★★★重要変化日の前日である9月3日に記録したプライマリーサイクル（以下、PCとする：ダウは通常13～23週、S&Pは通常15～23週）の天井（29,199）から約10.5%減少した。また、この時間帯でS&P先物も史上最高値を記録している（9月2日の3,588）。そして両市場は、次の★★★重要変化ゾーン（10月11日±3営業日）であった10月12日に2番天井（ダブルトップ）を形成した。前回のレポートではこう述べている“…この見方であれば、現行MCは以前提示した29,229±518に天井目標値が設定され、それは9月高値とのダブルトップのレンジとなる。現行相場は目下このレンジに入っており、尚且つ今週は強力な★★★重要変化日の影響下に入っている。一旦天井を付けると、（現行MC並びにPCの）ボトムに向けた2～5週間の急激な下げが始まり、相場は第1及び第2MCのボトム水準（25,992～26,537）をテストしよう”。ビンゴ！その通りとなった。

ジオコスミックス

唯一の問題は、この下落が11月9～10日の★★★重要変化日で出現して欲しかった—という事だけである。しかし、今回の★★★重要変化日は（米国時間）11月12日の木星・冥王星コンジャンクションと、11月13～14日の火星順行という重要な天体サインがあり、それぞれ±11営業日以内にPCの節目となる高安値と歴史的な相関関係を有している。10月30日の安値は、日柄的には許容範囲内であった。それでも、主要な相場反転の大半は重要変化日±3営業日以内に出現する。価格が史上最高値に向けて急上昇しているため、今週形成されるいくつかの重要な高値から急激な下落が起こる可能性がある事を考慮するべきだろう。

更に9日に天秤座の金星は牡羊座の火星とオポジション（180度）の関係になり、19日までの間「山羊座のステリウム」を構成する3惑星（冥王星・木星・土星）とそれぞれスクエア（90度）を形成。相互に90度、即ちT字スクエアの関係になる。そのため11月14日（土曜日）±3営業日はある意味で別の重要変化日になる、という点に注意したい。従って我々は、来週（11月第3週）中に最初の重要な高値が形成されるのではないかと睨んでいる。



実線が15日、点線が45日移動平均。

下の数字は主要な起点から何週経過したかを示している。11月6日から、その翌週9日にかけて、相場はギャップアップしてチャンネルライン上限を突破したという点に注目。

現時点で好ましいPCの見方：

現時点で好ましいPCの見方は、現行新PCが強気型であるというもの。今週（11月9日の週）は、ダウ平均がPCの2週目でS&PはPCの1週目であると見ている。両市場は史上最高値に急上昇、このPCは強気型であり、9週目の火曜日(12月29日)以前にはトップアウトしない事を示唆している。つまり、両市場とも10月30日の安値を下回らず、今年の末から来年の頭にかけて新高値を更新し続けるだろう。

想定シナリオが崩れた場合に考えられるPC：

想定シナリオが崩れた場合でも、現行PCの起点に違いはない。異なるのは、この上昇が2～5週でトップアウトし、弱気になるという点だけである。実際、今週と来週の★★★重要変化ゾーン内で相場はトップアウトする可能性がある。

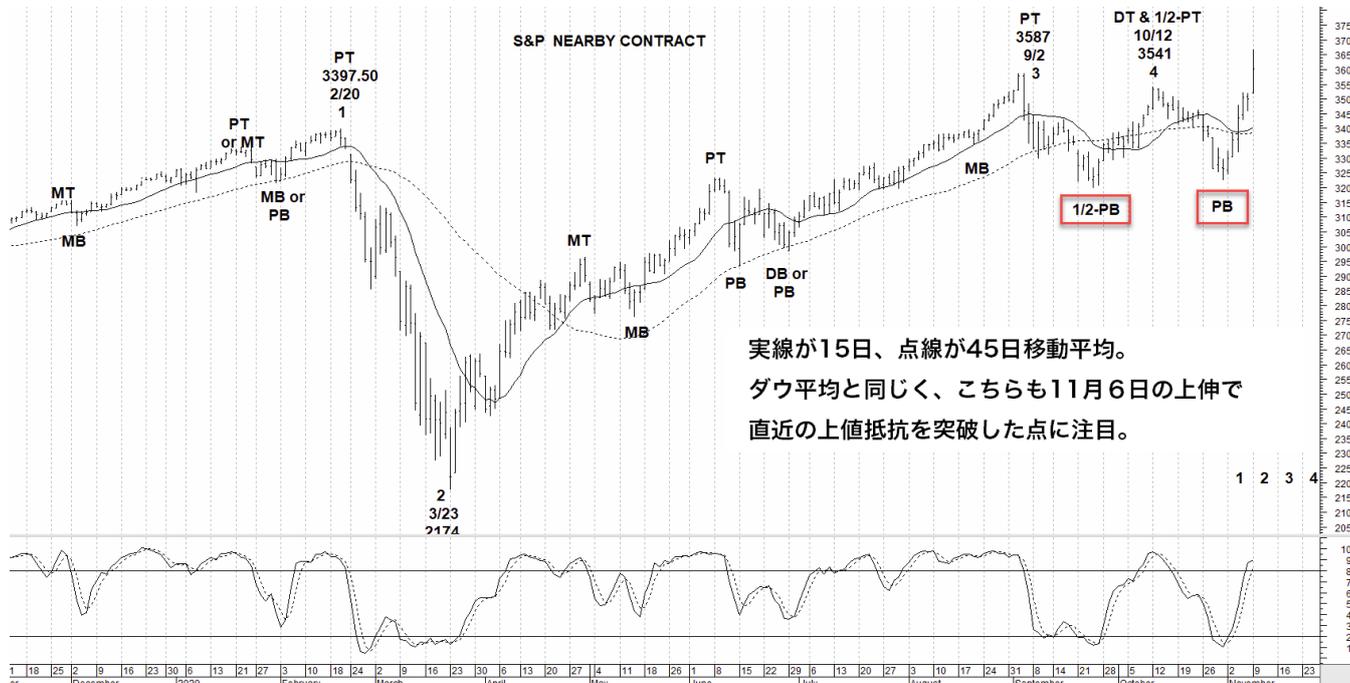
なお先月のレポートではこう述べていた“現在はポストクラッシュ後の高値、あるいは史上最高値へのテスト場面であると見ている。仮に現行PCが強気であるなら、この反騰は少なくとも8週間は続く。そして9月3日の高値29,199、更には2月12日の史上最高値29,568を更新する可能性は非常に高くなる。その場合、次の上値目標は29,229±515、あるいは33,326±1783になるだろう。最初の目標値は9月3日の高値、あるいは2月の史上最高値のどちらかに対してのダブルトップに過ぎない。ダブルトップはしばしばその後の修正安か、新たな弱気市場への開始を告げる。最初の目標値で止められた場合（つまりはダブルトップ）、2022年±1年に向けて劇的に下落する可能性が残る”。最初の上値目標を超えたので、強気の見通しが今より好ましいシナリオとなっている。

チャートパターン、テクニカル、及び目標値：

日足（及び週足）のチャートは、ダウ平均が11月9日に新高値ゾーンに“ギャップアップ”した事を示している。9日の安値は前週の高値を大きく上回り、前PCの天井であった9月3日の29,199を大きく上回っている。また、ダウ平均の日足には下降チャンネルラインが見て取れるが、このラインの上限を突破した事で31,457±627、次に32,392±1,092に上値目標値が設定される。

なお、期近のS&P先物では11月9日に史上最高値を更新。3,668に急騰した。現行新PCの天井目標値は3,850±108と4,071±224に設定される。

どちらの市場も15日スローストキャスティクスの数値は買われ過ぎの領域に入っているが、日柄的にはまだPCの序盤である。それでも、ここで★★★重要変化日に関係した弱気オシレーターダイバージェンスの出現(または出現しても一時的になる恐れもあり)を否定する事は出来ないので、健全な調整につながる可能性はあり得る。強気PCの高値からの健全な調整は、ダウ平均で28,038±448、S&Pで3,446.50±52.50に設定される。しかしながら、このレベルの下落でさえ深刻となる可能性があり、28,750となるとダウ平均を弱気のチャンネルライン内に戻ってしまう。



実線が15日、点線が45日移動平均。
 ダウ平均と同じく、こちらも11月6日の上伸で直近の上値抵抗を突破した点に注目。

この状態が引け値ベースで3営業日連続した場合は弱気シグナルとなり、特にそこで（オシレータ並びに異市場間の）弱気ダイバージェンスが出現していた場合は注意を要する。

なお、先月のレポートではこうも述べていた“大統領選は、大きな反発、または急激下げを引き起こす基本的なファンダメンタルズでもあるが、それは11月12～13日±11営業日で発生する火星順行や、木星・冥王星コンジャンクションの影響も受ける事になる”

これは、フェイクではなく真実 (true) であったようだ。

トレーディング・ストラテジー

ポジショントレーダは、10月30日の安値以下の引け値にストップロスを入れて、15日及び/または45日の移動平均、またはこのレポートで指示した下値目標値で買い参入する事を推奨したい。積極的なトレーダも同様のストラテジーを推奨する。

ただ、非常に積極的なトレーダは、目先3市場間で異市場間弱気ダイバージェンスが発生した場合は売り参入を試みるかもしれない。ただし、それは恐らく短期トレードとなる。重要変化日を形成する期間である11月26～27日の感謝祭の休日に向けて相場は上昇する傾向があるため、その上昇前にショートポジションを閉じたいと思うだろう。

米国株式市場の短期重要変化日

11月11～12日	★	11月17～19日	★	11月24～25日	★	11月27日	★
12月4日	★	12月17～18日	★★★	12月22～23日	★★		

3. 金相場：反騰するも元の木阿弥

★★★重要変化ゾーン（11月9～19日）にあたる11月9日という日は、金相場にとってどれだけワイルドな時間であった事だろう。その前の週の5日に相場は前日比で50ドル強の反騰を見せ、その際に下降トレンドラインを突破した。しかし週明け9日の相場は中心限月12月限で一時1,966.10まで上昇して前週の高値を更新するも、そこから1180ドル下げを見せてその日のうちに1,848.00まで下落。9月24日の1,851.00と10月29日の1,859.20のダブルボトム水準を割り込んだ。しかし、この日の引け値は1,854.40でこのサポート水準を上回っている。更に言えば、この同じように下げた銀相場は9月と10月の安値を下回る事はなかった。そのため、両市場は★★★重要変化日当日に異市場間強気ダイバージェンスが発生した可能性が出て来ている。

ただ“金相場一時1,850割れ”の衝撃は、長期33.33か月サイクルにおける強気位相の見方を危険に晒している。現行31.33か月サイクルの起点は2018年8月16日の1,162.70（期近つなぎ足ベース）。このサイクルは2021年3～4月±5か月までにボトムをつけると目されている。つまり我々は、既にこの時間帯に足を踏み入れている事になる。

仮に、8月7日の史上最高値2,089.20（期近ベースなら2,078.00）が現行31.33カ月サイクルの天井であった場合、この相場は修正安として1,628.20±108.80まで下がる可能性がある。天井は、現行相場が引け値で1,790.00を割り込むと恐らく確認されよう。その時、現行31.33カ月サイクルはボトムに向けて下降線を辿っている筈である。これに加えて銀相場が21.81（12月限）を割り込んだ時、さらに大きな警報が鳴り響くだろう。

1を起点とする現行（第3）7.83年サイクルは3つの31.33カ月サイクルで構成されており、2で第1サイクルボトムを形成。ここから第2サイクルが始まっている。31.33カ月サイクルは2つの16カ月ハーフサイクルで構成。2Aで第1ハーフサイクルボトムをつけた（2Bはそのダブルボトム）。



長期サイクルの研究

先般登場した現行31.33カ月サイクルの日柄だけでなく、現行7.83年サイクルの日柄もまた終盤に差し掛かろうとしている。現行7.83年サイクルの起点は2015年12月3日の1,045.40。本年12月で丸5年が経過する事になる。一方、15年12月から18年8月までの第1サイクルを経て、現行第2—31.33カ月サイクルは11月で27カ月目になる。

今回掲載した週足を見ると、現行31.33カ月サイクルはハーフサイクルで2分割されているように見える。第1ハーフサイクルボトムは2019年11月12日の1,446.20で、本年3月16日の1,450.90はそのダブルボトムという見方だ。先般述べた通り、現行7.83年サイクルの起点は2015年12月3日の1,045.40。以降相場は高安値を切り上げて上昇トレンドを形成している。仮にここからの下げがこの上昇トレンド内の修正安に過ぎなければ、まだ現行7.83年サイクルは強気基調が維持出来る。更に強気な見方であれば、その修正安水準は先述の第1ハーフサイクルボトムである1,446.20から本年8月高値の上げ幅の38~62%訂正水準、あるいは1,767.70±76.00が直近のサポート水準になると考えられる。特に後者のサポートゾーンは重要である。何故なら8月に史上最高値を更新した際、この相場は当時1,788.00付近にあった上値抵抗を突破した事でその爆発的上昇に弾みがついたからだ。この上値抵抗ゾーンは本年4~6月にかけて1,780~1,810で構築された。そして現在、このレンジは下値サポートになっている。

直近の相場に話を戻そう。目先の相場が9日安値（1,848.00）を割り込む事なく支持している限り、現行31.33カ月サイクルが天井をつけたという保証は得られない。むしろ更なる高値を志向する可能性さえあるだろう。しかし引け値ベースで1,848.00を割り込むと、ここまで提示した31.33カ月サイクルボトムに関する下値サポートのどれかに現行相場は落ち込む事になると思われる。

もう一度整理しよう。現行相場は7.83年サイクルの中に位置し、その中に内包する第2位相（第2—31.33カ月サイクル）の中に位置している。31.33カ月サイクルは2つのハーフサイクルで構成されており、現行相場はその第2サイクルの中に位置している。

前回のレポートではこう述べていた“そしてこの天井形成場面は、現行7.83年サイクルにおける第2位相か、場合によっては第3位相で出現する確率が高い。そして繰り返すが、現行相場は目下第2位相の26カ月目である。ボトムは起点から25~38カ月目の何処か、つまり2021年3月±6カ月の何処かで出現する公算が高い。つまり現行相場は、日柄的には既に（第2—33.33カ月サイクルの）ボトム形成場面に入っているのだ。ただ、週足を見るとまだ25週及び37週移動平均を割り込んでいないので、ボトムはおろか天井をつけた事を確認するシグナルさえもまだ出現していない。言い換えれば、2021年9月まで出現するであろう現行33.33カ月サイクルボトムに向けた下げが出現する前段階にあり、まだ天井に向けた更なる上昇を指向する可能性も残されているのだ。実際、ここ

から相場が8月7日の高値(2,089.20)を突破するようなら、次の上値目標値は2,248.50±95.00に設定されよう。その一方で、この相場が25週、とりわけ37週平均を週足引け値で下回ると、現行(第2)33.33カ月サイクルが天井をつけていた事が示される。想定されるボトム形成場面は先述の通り2021年3月±6カ月であり、1,628±109に下値目標値が設定されよう。そして、実際にそのような場面が出現するまでの間、日足チャートを介してPCの動向を注意深く見守る必要がある”。

詳しくは次のセクションで述べるが、現行PC(通常15~21週)は9日の急落で弱気転換したかのように見える。しかし、目先の相場で1,966.10超えを果たすと見方は恐らく急変する。

PCの研究

冒頭でも述べた通り、★★★重要変化ゾーン(11月9~19日)にあたる11月9日という日は、金相場にとってワイルドな時間。この日の高値であった1,966.10は9月中旬以来の高値水準であり、この日の安値であった1,848.00は7月22日以来の安値水準であった。

今週は9月24日の安値1,851.00(週足ベースでは1,843.00)を起点とするPCの7週目である。通常、金相場のPCはその大半が3つのMC(通常5~7週)で構成されるか、2つのハーフPC(通常8~11週)で構成されるのだが、7週目の9日にサイクル内高値が更新されたので、現行PCは後者の2位相パターン。しかもその日のうちに起点である9月安値を僅かに割り込んだ事から、この高値は第1ハーフPCの天井だけでなく現行PC自体の天井であった可能性が出て来た。一般的に、実勢相場が下降局面でPCの起点を割り込むと、そのPCは弱気型に転換する。弱気型PC内での最高値はボトム形成時で、その間相場は高安値共に切り下がり続ける。

しかし、6日安値と起点である9月安値との差は僅かに3ドル。6日の引け値は1,854.40で9月安値を上回っていた。従ってこの下げは相場の“ダマシ”であった可能性がある。そしてこの“ダマシ”は、目先の相場が6日安値(1,848.00)を割り込むよりも先に、6日高値(1,966.10)を突破すると立証されよう。多くの場合、これは保合い相場の「放れ待ち」の状態と同じで、しばらくこの高安値のレンジ内で取引された後、上下どちらかの方向に“放れた”方にトレンドは生じる流れになりやすい。



では、現行PCが“ダマシ”ではなく弱気PCで、尚且つ現行31.33カ月サイクルも弱気に転じていた場合はどうだろう。まず、目先の相場は1,848.00を割り込む事は間違いない。次に、現行PCのサブサイクルは2位相パターンで構成されているので、第1ハーフPCボトムに向けて下げている事になるだろう。もしそうであれば今週は第1ハーフPCの7週目でもあるので、ボトムをつける日柄余地は通常でも1~4週間ある。その間、ハーフPCボトムに向けた下げが続くと思われる。ハーフPCまたはPCのボトム目標値は1,727.90±42.65に設定される。

そしてここまで下がるという事は、先般「長期サイクルの研究」の中で提示した“1,785~1,810”の下値サポートを割り込む、という事を示唆している。実際にそうなるのであれば、「8月高値をもって現行31.33カ月は天井をつけた」という点が強力に示され、更にその8月天井は、より大きな7.83年や23.5年長期相場サイクルの天井であった可能性が出て来るだろう。

トレーディング・ストラテジー

現在、全てのトレーダはロングしているかと思う。ただ今回のレポートで記述した通り、★★★重要変化日であった11月9日にたった一日で9月中旬以来の高値を更新後に7月22日以来の安値を更新し、その過程で現行PCの起点である9月と10月の安値を（僅か3ドルだが）一時的に割り込み、尚且つそれが中期及び長期相場サイクルの後半で出現した事を鑑みると、ロングしているトレーダは御身を守る必要性が出て来ているのかも知れない。

先ずポジショントレーダには現時点で2つの選択肢がある。1つ目は現時点で全ての買い玉を手仕舞いして様子見に転じ、その後相場が1,966.10を再突破した所で改めて買い参入を図る、というもの。2つ目は金相場に続き銀相場までが9月24日の安値（12月限で21.81）を割り込む事態に発展するまで一つまり現行PC並びに現行31.33カ月サイクルが弱気に転換したという事を確認するまで一は、リスクを取って買い玉を保持する、というものである。この二者択一の行動は、各自のリスク許容度に委ねられる。

一方、積極的トレーダは目先の相場が11月9日の高安値のレンジを上下どちらかに“放れ”るまでは両サイドで取引が出来るのではないか。つまり、目先は1,848以下の引け値にストップロスを入れて逆張りの買いを仕掛け、ストップアウトした場合は1,966.10以上の引け値にストップロスを入れて損切りドテンに転じ、以降は全ての反騰場面（例えば1,907.00±14付近）で売り参入を図るという作戦である。

私自身は、★★重要変化日の時間帯では節目となる何らかのボトムよりも天井の方が出現頻度は高いと見ているので、（1,848を割り込んだ場合）現行31.33カ月サイクルボトムに向けた下げが始まっている—という見方により傾いていくのではないかと思っている。ただ、1,966.10超えの場面が発生した時点でこの見方自体を変える必要が出て来るだろう。また、引け値で1,950超えの場面が起こっただけでも（強気方にとって）見栄えは良くなると思う。

金相場の短期重要変化日：

11月11～12日	★★★	11月16日	★	11月24～26日	★	12月2～3日	★
12月7～8日	★	12月9～10日	★	12月11日	★	12月14～16日	★★★

4. 日経平均株価：29年ぶりの高値更新

当欄執筆時点（米国時間11月10日）で、日経平均株価は1991年6月以来の高値水準となる25,279まで暴騰している。それは29年前であり、アストロロジャリーは土星回帰（土星が太陽の周りを回る軌道は約29年）と認識するだろう。そして現在、相場は2018年10月2日に記録した数十年來の高値である24,448を突破している—もともと、この高値を記録した数週間後、相場は22.5%下げて同年12月26日に18,948を記録したのだが。

ただ今回の新たなブレイクアウトは、2020年3月19日にボトムアウトした場面における長期相場サイクル位相の不確実性を解消させた。即ち、本年3月安値は4年サイクルボトムであった事が確認されて、ただの16カ月サイクルではなかった事も確認されたのだ。

長期サイクルの研究

当レポートでは以前からこう述べていた“(日経平均株価の長期相場サイクルは) 以前から当欄で提示している見方からほとんど変わっていない。それは、コロナ禍に端を発したパニック売りで出現した2016年11月以来の安値水準である3月19日の16,358の扱い方である。…いま考えられるのは2つ。一つは2016年2月(14,864)と6月(14,864)のダブルボトムを起点とする4年サイクルのボトム形成場面。そしてもう一つは2018年12月26日の18,948を起点とする(第2)33カ月サイクルを構成する第1—16カ月サイクルボトム形成場面。3月安値は、この2つの内のどちらかだと思われる。…今回の反騰が示唆するものは、前者の見方である。更に上昇すると、より前者の可能性が高まる。ここから相場が1月の24,115を上回って年初来高値を更新すると、長期相場サイクルは後者ではなく前者、即ち3月安値が(第1)4年サイクルボトムであった事が確認されよう。…3月安値からの上伸は今月も続いている。従って、3月安値は4年サイクルボトムであった公算がより高くなっており、現行相場の基調は依然として強気になりそうだ。しかし今月は3月安値から6カ月が経過しているものの、未だに1月17日の年初来高値(24,115)は更新出来ていない。ただ少なくとも、この3月安値が16カ月サイクルボトムであった事だけは確かであったと思われる。従って、この3月安値が2016年のダブルボトムに起因する4年サイクルの第三位相(第3—16カ月サイクル)のボトムであったなら、現行相場は次の4年サイクルの第一位相(第1—16カ月サイクル)なので強気の見方になる”。



そして今回の上昇をもって3月安値が4年サイクルボトムであった事が明確になった。同時に16カ月サイクルボトムでもあったのだが、サイクルの優位性を考えると、前4年サイクルの第三位相（第3-16カ月サイクル）のボトムであったという見方になる。

従って今月は、新4年サイクルの8カ月目であり、同時にこの4年サイクルに内包する第一位相（第1-16カ月サイクル）の8カ月目でもある。現行16カ月サイクルはハーフサイクルで2分割されると目されており、日柄的には間もなく第1ハーフサイクルが天井をつける公算が高いが、今のところ、現行相場はブレイクアウトモードの渦中にある事は間違いない。

なお前回のレポートで、我々は日経平均の動きをこう捉えていた。即ち“まさに3月以降での新高値は、ここから7カ月目にあたる10月9日に更新された。先述の通り、現行16カ月サイクルが第2-33カ月サイクルにおける第二位相であった場合、その天井は起点から2～6カ月目にするので、日柄の観点からこの弱気の見方は除外された事になる。しかしその一方で、3月安値が新4年サイクル、及びこのサイクルに内包する第一位相（第1-16カ月サイクル）の起点であった場合、相場基調が強気であると示されるには起点から8カ月以上は高値を指向する必要がある。とはいえ、10月に新高値が更新されているので、3月安値は第3-16カ月サイクルボトムであり、ここで前4年サイクルはボトムをつけた一と定義したい。ただし、現行相場がここから2018年1月と10月、更に本年1月の高値で構成された24,115～24,448のトリプルトップを突破しない限り、この定義はまだ確定したわけではない、という点は付記しておく。もっとも、相場は現在この値位置に迫っている。現行相場が引け値で24,448を上抜けると、 $25,942 \pm 1,307$ もしくは $28,822 \pm 2,575$ に新たな上値目標値が設定される”。

現時点で相場は24,448を突破し、上記の第一目標の水準に到達しているが、目先の相場は更なる高みを目指す可能性を秘めている。

一方、長期ジオコスミックサイクルは、近日中に長期相場サイクルの天井が出現する可能性を示唆している。少なくともそれは、現行16カ月サイクルの天井場面であると思われるが、場合によってはより大きな新4年サイクルの天井形成場面かも知れない。

ただし、4年サイクルが天井をつける可能性に関しては、現時点では時期尚早感は否めない。それでも、前回のレポートでの指摘をここで改めて繰り返そうと思う。即ち“…直近に関しては本年12月21日（日本時間22日）に出現する20年周期の木星・土星コンジャンクションに注目しておきたい。往々にして、この天体位相は±5カ月のオーブ（許容範囲）を伴って長期相場サイクルの天底（特に天井）と関連するケースが少なくない。前回この天体位相が出現したのが20年前にあたる2000年5月29日。日経平均株価はその前の月の4月に長期相場サイクルがトップアウトしている。以降15年にわたって、相場はこの水準まで戻る事はなかった”。

ジオコスミック面での指摘はこれだけではない。現在と1999～2000年にかけての長期惑星サイクルの推移とは類似点があり、これは前回のレポートでも注目すべきポイントとして指摘していた。即ち“…12月の木星・土星コンジャンクションは風のサインにあたる水瓶座内で0度の関係になる。そして2021年に入ると両惑星は牡牛座の天王

星と1～2月にかけてそれぞれスクエアの関係に。つまり、2020年の年末と2021年の初頭で彼らの立場は真逆にあると言っても過言ではない。(言い換えれば)2000年の時のように、天上のパターンは世界の株価指数の動きと合致する可能性がある。即ちそれは、2000年4月から2003年4月までのように、2020年12月～2021年2月±5カ月の何処かで出現する(節目となる)高値を境に数カ月、場合によっては数年にわたって、下降局面が続いていく—という可能性である”。2000～2002年のような株式市場のパターンを引き起こすには、何か「ブラックスワン」的な事象が出現する必要がある。何故なら、長期相場サイクル位相は2000～2002年の時よりも強気になっているからだ。

繰り返しになるが、現行相場は目下新4年サイクルの8カ月目に入っている—というのが現時点における我々の認識である。言い換えれば、それはこの新サイクルが2024年5月±11カ月までボトムをつけないという事に他ならない。更に言えば、日柄的にこのサイクルの起点から天井までの反騰局面は通常でも18～49カ月間続くので、2021年9月～2024年4月まで待たないと天井は出現しない—という事をも意味している。もっとも、これまでの4年サイクルの中で最も短い反騰場面は、起点から僅か6カ月(1962年10月～1963年4月)であった。

一方幅幅に関しては、日経平均は起点から天井まで最低でも50%の上昇率がある。起点である3月安値は16,358なので、これは現行相場が少なくとも24,537(16,358×1.5)以上の値位置になるという事になり、既にこの水準には到達している。仮に現行4年サイクルの基調が強気であれば、トップアウトは30カ月目(2022年9月)以降となり、140%(16,358×2.4=39,259)超の値位置に到達する可能性がある。

ただし、2020年12月21日(日本時間では22日)の木星・土星コンジャンクションと2021年2～12月の土星・天王星ウェニングスクエアという、2つの強力なジオコスミックサイクルの性質を考えると、必ずしも現行4年サイクルの基調が強気になるとは限らない。特に、現行相場は29年ぶりの高値を更新したばかり故に現行相場は強気になっていくように見えるのだが、ジオコスミック要因は強弱いずれのトレンドであろうと、サイクル内のトレンドを「分断」に導く要因となるかも知れない。

中期サイクルの研究

16カ月サイクルは、8.33年サイクルを構成する4年及び33カ月サイクルのどちらとも関係している。通常、サイクルはその大小を問わず、より小さなサブサイクルによって2分割、もしくは3分割されるのだが、4年サイクルは3つの16カ月サイクルで構成され、33カ月サイクルは2つの16カ月サイクルで構成されている。そして現行8.33年サイクルを構成するサブサイクルは、3つの33カ月サイクルではなく、2つの4年サイクルで構成されている。

従って先述の3月安値は第2～4年サイクルの起点にして、このサイクルに内包する第1～16カ月サイクルの起点でもある—という見方となり、11月はその8カ月目にあたる。

前回のレポートではこう述べていた“現行16カ月サイクルは、3位相パターンで構成された4年サイクルにおける第一位相である。通常、3位相パターンの第一位相は強気であるケースが大半なので、このサイクルの天井が起点から8～13カ月、つまり本年11月から来年4月までの何処かで出現しても驚くべき事象ではない。そしてこれは先述の通り、長期惑星ペアサイクルのパターンとも合致する”。実際、相場は29年ぶりの高値を更新したので、基調は既に強気である。ただ、現行16カ月サイクルは日柄的には丁度中盤に来ている。このサイクルはハーフサイクルで2分割されると目されているので、第1ハーフサイクルの天井はいつ出現してもおかしくはない。天井が出現すると、そこからハーフサイクルボトムに向けた強力な下降局面が出現しよう。そしてこのボトムは起点から11カ月目(2021年2月)までに出現すると考えられる。ただ第1ハーフサイクルボトム出現後は第2ハーフサイクルの天井に向けた反騰が出現する。その過程で相場は、再度第1ハーフサイクルの天井を試しにかかるか上回るのではないだろうか。

なお、これに関して前回のレポートではこう述べていた“現行16カ月サイクルが近日中(起点から8～9カ月目)にハーフサイクルボトムをつけるかも知れない—と疑念を抱くもう一つの理由は、週足ベースでのスローストキャスティクスの動きにある。掲載チャートを見ても分かるように、この指標は買われ過ぎの領域にあって、尚且つ80%以上の水準で弱気ダブルループパターンを形成しているのだ。確かに現状、指標は上昇しているため、現行相場は更なる高値を指向する可能性は依然として残されている。しかし、同時にプルバックはいつ始まってもおかしくない、という点も示唆。ただ、実際にプルバックが始まった場合、遅くとも1月までには終了すると思われる”。

恐らく現行相場は、この第1ハーフサイクルボトムに向けた下降局面において、今回掲載した週足に示されている24週平均を割り込む公算が高く、場合によっては36週平均をも割り込む可能性もあるだろう。ただし、起点である3月安値(16,358)を割り込む事はないと思われる。

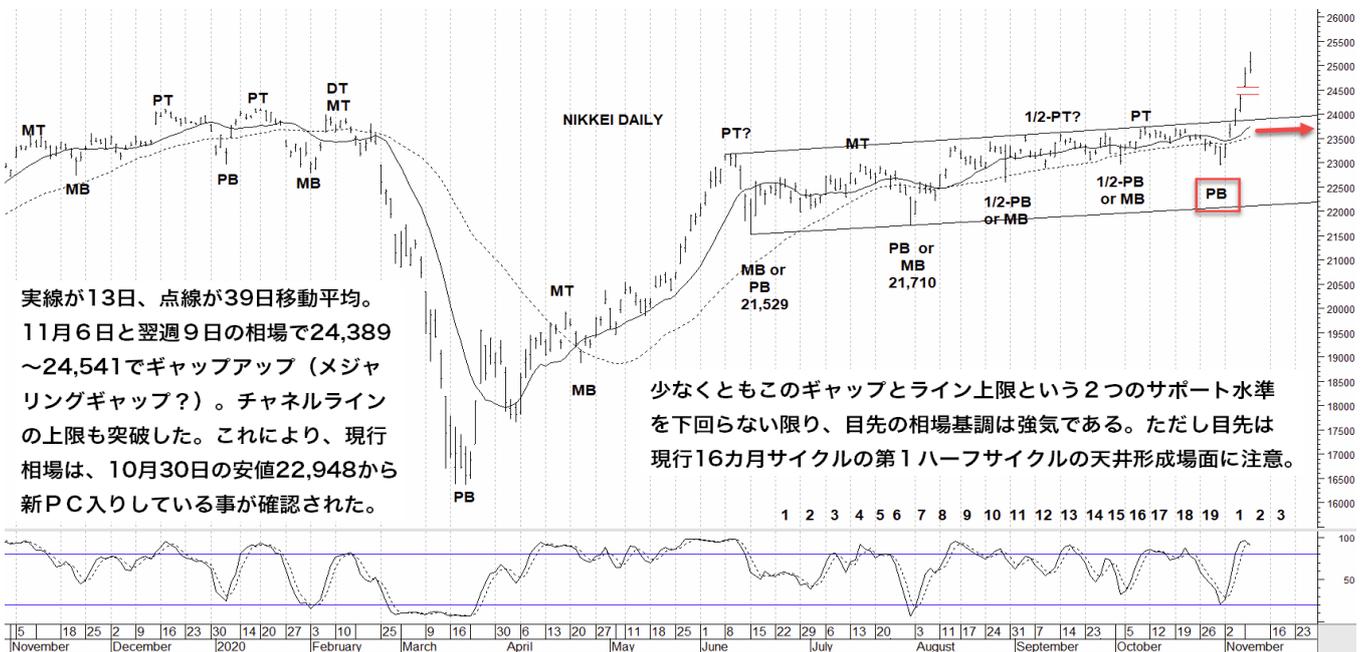
ただいづれにせよ、起点から7~11カ月目に出現するであろう第1ハーフサイクルボトムに我々は注目する必要がある。週足ストキャスティクスは現在も買われ過ぎの領域にあって弱気オシレーターダイバージェンスになっている事から、ハーフサイクルボトムに向けた下げはいつ始まってもおかしくはない。そしてこのボトムは、これから記述するPCボトム形成場面と合致するのではないかと睨んでいる。

PCの研究

前回のレポートでは現行PC（通常12~20週）の起点が6月15日の安値（21,529）か7月31日（★★重要変化日）の安値21,710（と上記6月安値のダブルボトム）かで見方が分かれていた。しかし11月の上伸によって、ここまでの週足サイクルの見方が明確化している。

先ず2016年11月以来の安値水準であった3月19日の16,358を起点としたPCは、そこから13週目にあたる6月15日にボトムを形成。更にそこから19週目にあたる10月30日に22,948で次のPCボトムが出現。今週はこの10月安値を起点に新PCの2週目に入っている。

現行PCはまだ2週目なので、ここからは強弱2つのシナリオを描く事が出来る。ただ、現行相場は先般29年ぶりの高値を記録したばかりなので、私自身の見方は強気シナリオである。



現時点で好ましいサイクル位相：

現時点で好ましいPCの見方は、現行新PCが強気型であるというもの。実際、相場は11月6日から翌週9日にかけて24,389~24,541で“ギャップアップ”している。このギャップは現時点での下値サポートであり、（強気シナリオであれば）破られるべきではない下値水準である。そのため、仮に目先の下げでこのギャップが破られると、強気方にとっては最初の懸念材料となろう。ただ実際にそうなるまで、このギャップは所謂“メジャリング・ギャップ”と呼ばれる強気テクニカルサポートであり、25,982±358に上値目標値が設定される。今回のギャップは、間違っても相場の終盤に出現するようなイグゾースション（疲労困憊）ギャップのようには見えない。

更に、掲載した日足を見ても分かるように、今回の上伸で相場はギャップアップだけでなくチャンネルラインの上限を突破している。この突破により、25,120±403に上値目標値が設定され、既に現行相場はこの領域に達している。これ以外にも25,144±427にも目標値が設定されるのだが、既に相場はこの領域にも到達している。

強気型PCでは、一般的に以下の2点が発生しがちである。1つ目は上昇過程で前PCの天井を上回る事。これは既に実現している。2つ目は天井に向けた反騰場面が少なくとも8~13週間続く事。先述の通り、現行PCはまだ起点から2週目である。そのため、このPCが天井をつけるまでの間に、目先の上げ幅の38~62%程度の修正安が出現する可能性がある。11月9~19日は★★★重要変化ゾーンであるため、目先の相場は何処かでトレーディングサイクルの天井をつけるかも知れない。もしそうであれば、そこから“38~62%程度の修正安”が1~3週間出現しよう。この修正安水準が維持されているなら、現行PCの基調は依然として強気であり、ここからの反騰で相場は新高値を追いかける事が出来る。ただこのレンジを割り込むと基調はニュートラルとなり、起点である10月安値（22,948）を割り込むと弱気に転換する。

想定シナリオが崩れた場合に考えられるPC :

想定シナリオが崩れた場合でも、現行PCの起点は10月30日のままである。ただ、こちらの見方は弱気シナリオ。現行16カ月サイクルは今後2～5週間以内に天井をつける可能性があり、尚且つこの時間帯と先述の★★★重要変ゾーンが重なっているため、目先の相場は16カ月サイクルの天井を契機に弱気に転換し、必然的に現行PCも弱気型に転じる可能性がある。では、PCの強弱をどうやって見分けるのか？

現行PCが強気型なら、先述のギャップアップゾーンを週足ベースで下回る事なく維持しよう。ただ、仮にこのゾーンを割り込んだとしても今回の日足にも掲載している（ここまでのPCの天井と関連している）チャンネルラインの上限は維持されるだろう。現時点でライン上限は23,850～23,900付近に位置している。更に、下降場面が出現しても上げ幅の38～62%程度の修正安で留まる筈である。この水準は現時点で24,113±275に位置している。逆に言えば、これらのサポートゾーンを全て下回ると、ここまでの強気の見方に懸念が生じるという事になる。

つまり、ここからの下降局面においてこれらのゾーンが維持され、そこから反騰した相場が新高値を更新すると、強気の視点がサポートされる事になる。

トレーディング・ストラテジー

ポジショントレーダは10月30日の安値 (22,948) 以下の引け値にストップロスを入れ、修正安場面が来た際には、今回のレポートで提示した各種下値サポート水準まで下げた如何なる場面においても買い参入で対応する事を推奨したい。

一方積極的トレーダは、前回のレポートで“24,115もしくは24,448以上の引け値にストップロスを入れて売り参入を図るのが恐らく望ましい。実際、既にこのストップロス水準を入れて既に売り参入しているトレーダもいるかと思う。まだショートしていない積極的トレーダも上記のストップロスを入れて売り参入を図りたい。実際に下がった場合、11月12～14日±1週間の何処かで利食いしてドテンロングに回るポイントを探りたい”と述べていたので、既に売りポジションを利食いし、中にはドテンロングに回っているトレーダもいるかと思う。まだ買い参入していなければ、ポジショントレーダと同じく、10月30日の安値 (22,948) 以下の引け値にストップロスを入れ、修正安場面が来た際には、今回のレポートで提示した各種下値サポート水準まで下げた如何なる場面においても買い参入で対応する事を推奨したい。

ただ、極めて積極的なトレーダは★★★重要変化ゾーン（11月9～19日）で出現した高値から恐らく売り参入を試みたくはないだろうか。売るにやぶさかではないが、その際は今回のレポートで提示した各種下値サポート水準まで下げた所では利食いし、ドテンロングに回る事を検討していただきたい。ここで留意すべきは、これまで23,725～24,448にあったPCの天井圏は上値抵抗であったが、現在は下値サポートになっているという点である。なお、より詳細な数値や戦術については、「MMA日経週報」の中で提示するつもりである。

5. 米ドル/円：下降チャンネルライン内で苦闘中に新PC入りか

ドル/円相場は前回のレポート発行後も依然として高安値切り下がり線形を続け、11月6日には103.16まで下落。直近の安値であった9月21日の103.99をも割り込み、数カ月ぶりの安値水準を再更新した。

前回のレポートでは“この相場は目下PC（通常26～40週）のボトムをつけるべく、もう一段安い新たな下降局面に入った可能性がある”と述べていたが、この6日安値は、2016年11月以来の安値水準である3月9日の101.17から34週目に相当。従って日柄的には、この3月安値を起点としたPCのボトム形成場面としては十分条件を揃えている。

通常、ドル/円相場のPCは3つのMC（通常9～14週）で構成されるか、2つのハーフPC（通常13～20週）で構成されるかのどちらになるのが大半である。上記3月安値から20週目にあたる7月31日、相場は104.17まで下落後に急反発した。そしてこの日は、★★重要変化日（7月31日±3営業日）の当日でもあった。つまりこの安値は、第1ハーフPCボトムであったと見ている。そして、先述の6日安値は7月安値から起算して14週目。従ってPCだけでなく第2ハーフPCのボトム条件も日柄的にクリアしている。そしてこの日は第3（最終）MCの14週目でもあった。つまり、3つの相場サイクルが全てここで収束した公算が高く、ボトム形成場面としては日柄的に完璧であったと言えるだろう。従って今週は新PCの1週目。もしこの読みが正しければ、「全てのサイクルの序盤は強気」の原則が適用される。仮にこのPCが最終的に弱気型であったとしても、目先の反騰は最低でも3～8週間続こう。



長期相場サイクルに関しては、現行5.5年及び22.5カ月サイクルの基調は依然として弱気と見ている。それ故に、現在の反騰局面はあくまで弱気の22.5カ月及び5.5年サイクル内での修正反騰に過ぎない—という見通しになる。つまり、目先の相場がどんなに反騰したとしても、前PCの天井であった3月24日の111.71を上回る事はないと思われる。ただ、想定される3～8週間の反騰目標値は“通常”の計算で 107.44 ± 1.02 という数値がはじき出される。

現時点で好ましいサイクル位相：

繰り返しになるが、今週は11月6日の安値を起点とする新PCの1週目—という見方が現時点で好ましい週足ベースでのサイクル位相である。「全てのサイクルの序盤は強気」の原則が適用されるという事も先般述べた。弱気PCの場合、3つのMC、2つのハーフPCのどちらかでサブサイクルが構成されたとしても、その第一位相の天井がPCの天井になる事が多い。言い方を換えると、仮に何処でこの弱気PCが天井をつけたとしても、現行PCの残りの日柄（25～39週）は高安値切り下がり線の線形になる。

先述の通り目先の反騰目標値は 107.44 ± 1.02 。これはそのまま現行（第1）MCの天井目標値になる。ここで、今回掲載した日足をご覧いただきたい。先述の3月24日の高値に起因する下降チャネルラインが引かれているが、その上限は現在105.75付近に位置している。従って上記の目標水準まで反騰した場合、上限は突破される公算が高い。更には前PC内の最終MCの天井であった8月の高値水準（106.94～107.04）を試しにかかるか、それをも上回る可能性は否定出来ない。しかし110.50超えは難しいと思われる（詳しくは今回掲載した週足を参照の事）。

想定シナリオが崩れた場合に考えられるPC：

こちらの見方でも、PCの起点は11月6日と変わらない。先般の見方と異なるのは基調。つまり、現行PCが強気型である—という見方が、想定が崩れた際に考えられる代替シナリオである。

PCの日柄は通常で33週±7週とされている。この強気シナリオの場合、天井はこの日柄の前半で出現する事はなく、むしろ後半で出現（恐らく起点から16週目以降）しよう。

このシナリオに変わる可能性は否定出来ない。その理由は現行PCの起点である11月6日の安値の値位置にある。前PCの起点は3月9日の101.17。そのため現行PCは前PCよりも高い値位置で始まっているのだ。しかし、前PCの天井である3月24日の111.71は、更にその前のPCの天井であった2月20日の112.21を超え切る事が出来ず、弱気の「レフトトランスレーション」の線形に終始した。それでも、このPCはボトム形成時に起点を割り込む事なく、安値切り上りの格好で新PCが始まっている。これは現行PCが30%の確率で強気型PCになる可能性を示唆している。とはいえ、それよりも高確率な見通しは現行PCが天井をつける際に112.21を上回る事なのだが。

仮にこのPCが強気型で進展するなら、反騰期間が8週間を超え、更には起点から16週目以降まで続く事は言うまでもなく、前PCの天井である3月24日の111.71を試すか上回るだろう。その際の上値目標値は 113.70 ± 1.48 。ひょっとするとそれ以上の上昇も考えられる。



週足ストキャスティクスに基づいて目先の相場展望を考えると、実際のこの相場がそこまで強気になる可能性は排除する事は出来ない。現在この指標は売られ過ぎの領域にあって、上方転換しようとしている。

今回掲載した週足を見るとわかるように、週足にも下降チャネルラインを引く事が出来る。

ライン上限は現在110.50～111.00付近。現行PCが強気に転じている—とみなされるには、先ずこのライン上限を突破する必要がある。長期相場サイクルの観点では2021年8月～2022年6月までの何処かで、現行5.5年サイクルに内包している3つ目にして最後の22.5カ月サイクルがボトムをつける事になっている。そのため、このようなボトムが出現する前に果たしてライン上限を突破するだろうか。私自身は疑念を抱いている。

なお、前回のレポートではこう述べていた“…ジオコスミック面では今週（10月第三週）が重要である。同時に、11月12～14日±1週間も重要。この時間帯で火星逆行は終了し（11月13～14日）、木星は海王星と本年3回目にして最後のコンジャンクションを形成する（11月12～13日）。そのどちらも通貨市場に影響を及ぼす天体イベントであり、実質的にそれは金融市場全般に影響を及ぼす公算が高い”。

ここで提示していたジオコスミック要因はどうやらPCボトム形成場面に作用したようだ。より大きなサイクルボトム形成要因として機能した可能性もあるが、今のところは11月6日の安値を前PCのボトムにして現行PCの起点として扱い、111.00以下を維持している限りは、起点から3～8週間の反騰を待つ、そこから売り参入を図る事を検討したい。

トレーディング・ストラテジー

前々回のレポートではトレーダに以下のアドバイスをしていた。即ち“…トレーダは売り参入しているかと思う。まだ売り参入していなければ、107.00以上の引け値にストップロスを入れてショートするのが恐らく望ましい”。

そして前回のレポートではこうアドバイスしている“ここから新規参入するトレーダにとって、このアドバイスは現在も有効であると考え。ここから相場が11月12～14日±1週間に向けて下げていた場合は利食いを開始。場合によってはドテンロングする事も可能かも知れない”。

実際、相場は上記の時間帯に向けて下落した。従って利食いしているトレーダもいるかと思う。そしてここからは103.16以下の引け値にストップロスを入れて買い参入する必要が出て来ている。その上で、反騰場面が107.00±0.50付近で停滞するようなら幾許かの利食いをを行い、更に110.50±0.75付近で停滞するようならそこでも幾許かの利食いを行いたい。更にそこでテクニカル面で相場反転の兆候があり、尚且つ重要変化日のエリアであった場合は、11月3週目以降はこのレンジ内のどこかで売り参入を検討しても良いだろう。そして、これに関しては「MMAカレンダーレポート」で詳細を追いかけていこうと思う。提示して行くつもりである。

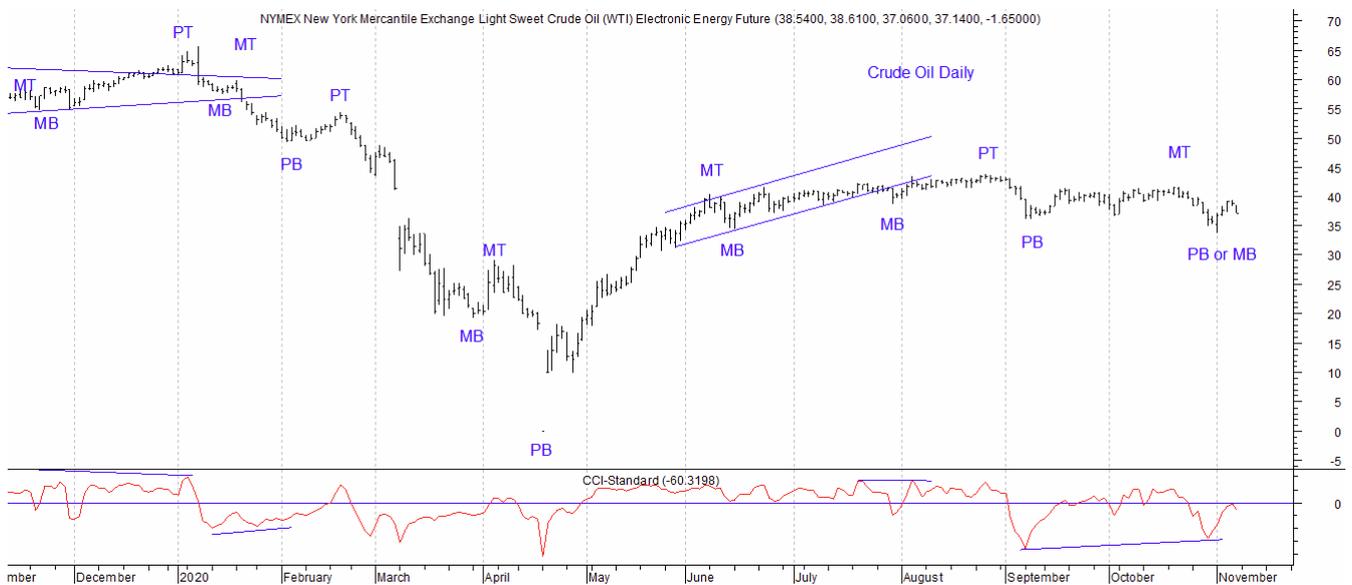
6. 原油：長期サイクルの初期段階 — 原油の上昇を支持

原油相場は、前回のレポート発行後も下落し、9月8日の安値を割り込んだ。

現在の主な問題は、4月20日を起点とするPC（通常15～21週）が28週目にあたる11月2日に33.64で延長PCボトムをつけたのか、それとも起点から20週目にあたる9月8日の36.13で通常のPCボトムをつけ、ここを起点とする新PCが弱気型に転換したか—という点にある。そのどちらのシナリオを取るかによって、原油の短期的な方向性に影響しよう。だがいずれにせよ、我々の研究では4月20日に複数の長期サイクルの安値をつけた事を示唆しており、今後も引き続き価格上昇を支持する事になるだろう。

長期サイクルがボトムをつける際、往々にして内包する最後のPCは歪み（延長・短縮）が生じやすい。この11月2日の安値で延長PCボトムが出現したというシナリオは、原油の短期的な方向性の面で、強気派にとっては最良のシナリオである。何故なら仮に9月安値が現行PCの起点であった場合、既に相場は起点を割り込んでいたため、先述の通り弱気PCに転換した事になるからだ。このシナリオが有効なら今週は9週目。弱気PCはボトムをつけるまで高安値切り下がりとのトレンドパターンになるため、日柄余地も鑑みると今後6～12週間、戻り売りの基調になる可能性が高い。ただ、11月2日の安値は起点から8週目に出現した。従ってここは第1MCボトムであり、今週はPCの9週目にして第2MCの1週目という見方になる。どちらにせよサイクルの序盤は強気なので目先の反騰がどこまで伸びるかに、現行相場が新PC入りしているのか、それとも弱気PCの中盤なのか—という判断が委ねられている。

長期サイクルに関しては、前回のレポートで“4月20日の安値が、18年、9年、及び3年サイクルボトムであった。3年サイクルは前回2016年2月がボトムであったため、今回は大幅な歪みが発生した事にご留意頂きたい。つまり、その意味は更に長期のサイクルがボトムをつけたという証左となる”と述べていた。これは引き続き我々の見解であり、価格が再び長期サイクルボトムを割り込む場合にのみ変更される可能性があるものの、現時点ではシナリオ見直しの可能性は相当低い。従って、12月は新18年、9年、3年サイクルの8カ月目である。中期サイクルに関しては、12月は17カ月サイクルの8カ月目であり、以前から述べているように“これらのサイクルは全て、原油がまだ新高値を形成するのに十分な時間を残している事を示唆している”。



テクニカル分析においては、ニュートラル、またははっきりしないままである。11月2日の安値が延長PCボトムであった主要因は、実勢相場とCCI（コモディティ・チャネル・インディケーター）との間で強気オシレーターダイバージェンスが発生していた—という点が挙げられる。これは通常、下げのモメンタムが衰えつつあることを示す。この強気ダイバージェンスは、9月8日の安値形成場面では発生しなかったため、9月時点では（PCボトムに向けた）下落が完了していなかった—という可能性を示している。

なお、前回のレポートでは以下の通り述べていた。即ち“…9月8日のPCボトム以降、意義深い高値と安値を形成しながら上昇トレンド確立した事は重要である。上昇トレンドは高値と安値が切り上がる事で形成されるため、前PCの高値43.78を超えると、この市場にとってテクニカル的には非常に強気の兆候になる。それでも、原油は過去数カ月間、35.00～43.00の範囲で主に約8ドルの範囲で取引されている。この数カ月にわたる保合いからの放れは、この市場の方向性を示す明確な兆候になるだろう。上放れなら、少なくとも50.00～52.00までの上昇が見込まれるが、ここでインフレ圧力が高まるとすれば、原油価格を60.00～70.00のレンジまで押し上げる可能性さえある。一方で35.00～43.00の範囲を下回ると、20.00ドル半ばに下落する可能性もある”。

実際、仮に11月2日の安値で延長PCボトムをつけたとしても、前回のPCボトムの値位置より高い。ポイントは、目先の反騰が何処まで続くかという点にある。価格が引け値ベースで43.78を超える事が出来れば、相場は非常に強気に見え、50.00台に上昇し、最終的には60.00~70.00のレンジに上昇しよう。さもなければ、再度20.00台半ばまで下がり続ける公算が高い。

なお、目下ジオコスミックの観点では、潜在的に重要な安値を直近に付けている可能性が示されている。11月10日、太陽は海王星とトライン(120度)の関係になった、更に11月12日には木星と冥王星がコンジャンクション(0度)の関係になる。特に木星と冥王星は共に外惑星で公転周期が長く、その運行速度は遅い。そのため(有効な)タイムバンドを拡大する事が出来る。言い換えれば、今回の延長PCボトム形成場面は、(海王星と並ぶ原油の共同支配星である)木星と冥王星による、本年3回目にして最終回であるコンジャンクション形成場面と合致した可能性がある—という事になる。

更に次の重要変化日は11月27日±3営業日(★)があり、ここで金星は天王星とオポジションとなり(11月27日)、海王星は順行に戻り(11月28~29日)、満月にして月食がある(11月30日)。これは、新PC入りしていれば第1MC、弱気PCなら第2MCの天井形成場面と合致するかも知れない。

更に次の重要変化日は12月7~10日±3営業日(★★)。ここでは太陽が海王星とスクエアになり(12月9日)、金星・冥王星セクスタイル(60度)が出現し(12月10日)、新月にして日食がある(12月14日)。ここはMCボトムと合致する可能性が高い。

そして本年最後の重要変化日は12月24~28日±3営業日(★★)。あるいは冬至近辺も変化日として考えておいた方が良いかも知れない。影響力が強いと目されている木星・土星コンジャンクションは12月21日に出現。この付近で火星は冥王星とスクエアになり(12月23日)、太陽は天王星とトラインの関係になる(12月27日)。

トレーディング・ストラテジー

ポジションはロングしていたが、まさに36.00以下の引け値に入れていたストップロスが発動。残りの3分の2のポジションがストップアウトした。引け値で39.15を超えた所では再度買い参入し、その際35.50以下の引け値にはストップロスを入れておく。

積極的トレーダもポジショントレーダ同様にストップアウト。ここからはポジショントレーダと同じく引け値で39.15を超えた所では再度買い参入を図りたい、その際、同じく35.50以下の引け値にはストップロスを入れておく。